

## 納得できる歩み

今年度初めての、進路決定に向けた模擬面接を行いました。「仕込むための念入りな面接練習は不要」というのが私の考えです。人と話す時のマナーや言葉遣い、所作は、日常生活の中で身に付けておくべきです。進みたい方向については、仕込まれなくても語れるはずです。したがって、私との模擬面接は、自信をもたせられればよいと考えています。

校長室にやってきたのは、三年のH・Yさんでした。仲間より少し早めに進路決定に臨みます。校長室にはほとんど入ったことがない彼女です。緊張しているかなと思いきや、そんな心配は彼女の第一声で吹き飛びました。

「失礼しますー!」

この一言が彼女のイメージを決定づけました。適度な大きさの声でしたが、トーンが自信を表していました。私は彼女の声を聞いただけで「この子なら大丈夫だ」と判断しました。

校長の入り口から座席まで進む姿にも、オドオドしたところや自信なさげの様子は微塵もありません。慣れているかのような足取りで進み、私の前に用意された椅子の横に立つと、「気を付け」の姿勢の美しさが目に留まりました。出身校と名前もはきはきと話しい、いよいよ着席して核心に迫った質問に入りました。

「本校への進学を志した動機を教えてください。」

進学において、何にもまして重要な問いです。この問いに対する回答を聞くと、面接が仕込まれたものかどうか、進路ついて普段から真剣に考えているかがわかります。

H・Yさんの受け答えは自信にあふれていました。入室した時からそれを感じてはいましたが、彼女が話すことを聞いて、私の中ではそれが確信に変わりました。

仲間より一足早い受験であるということは、彼女の進学先が仲間のそれとは違うことを表しています。その事実から、彼女の進路決定に対する並々ならぬ決意がわかります。周りに左右されず、自分の意思を貫こうとしている彼女に、志望理由を尋ねるのはある意味愚問のように感じました。

H・Yさんの志望動機を聞いて感じたのは、「自分の希望は一朝一夕で生まれたものではないということ」「生まれてからこれまでに長い年月をかけて温めてきたこと」「そして「保護者とのかわりが自分の夢に大きな影響を与えたこと」の三点です。

中学時代に夢をもつことは難しいということもよく言われます。もったとしても、途中から思い悩んだり進路変更したりという可能性もゼロではありません。しかし、それらは長い人生からするとほんの一瞬です。大切なのはその時その時で納得できる歩みができているかどうかです。たとえ変更があっても、その経験がその後の自分により影響を与えることでしょう。

(十一月一日記)